

戦中期

昭和12(1937)年頃～昭和20(1945)年頃

戦火に包まれた神奈川

当時の神奈川は、相模原や横須賀などに旧日本軍の基地や工場などを数多く抱え、軍事的な要衝としての機能も担っていました。

昭和6(1931)年の満州事変を契機に、戦時体制が徐々に強化されていき、昭和12(1937)年には日中戦争が、昭和16(1941)年には太平洋戦争が開戦すると、国家総動員体制に突入しました。

戦況が悪化してくると、アメリカ軍による本土空襲の脅威がせまり、都市部で学童の集団疎開が開始されました。

そして、昭和20(1945)年にはアメリカ軍の空襲が本格化し、激しい爆撃が神奈川を襲いました。多くの人が犠牲になり、市街地は壊滅的な被害を受け、神奈川は疲弊していきます。

終戦 占領・接收の時代へ

昭和20(1945)年8月15日に日本はポツダム宣言を受諾し、長きにわたった戦争の幕が下されました。関東大震災からの復興を遂げていた神奈川県は、再び荒野からの出発を余儀なくされました。

終戦直後の神奈川県には、連合国軍が進駐し、重要占領地域として位置付けられました。戦前日本の体制から脱却するための民主的改革と戦災復興が進められる一方で、横浜、相模原、横須賀など多くの地域では、広大な土地とともに旧日本軍の施設や民間施設が接收され、自由に使うことは制限されました。これにより、神奈川県の復興が本格的に進められるようになるまでに、多大な年月を要することになるのです。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ